

極めて糖度の高い中生カンキツ新品種

「あすみ」

1～2月に成熟する中生カンキツは、果樹研究所が育成した「はるみ」、「せとか」、「天草」をはじめ、公立試験研究機関で育成された品種の普及が進んでいます。これらの品種の果実品質は優れてはいるものの、年や栽培条件によっては糖度上昇が十分でない場合や酸が高い場合があり、必ずしも安定して高品質果実の生産ができるとは限りません。そのような状況のなか、今回紹介する「あすみ」は安定して高糖度果実の生産が可能で、欠点があるがこれまでにない高品質果実の生産が可能な有望素材として期待されています。

☆ 技術の概要

1. 1992年に果樹試験場興津支場（現 農研機構果樹研究所カンキツ研究興津拠点）において、オレンジ香を有し良食味で、雄性不稔性かつ単胚性である「カンキツ興津46号」に、中生で高糖度かつ良食味で、じょうのう膜が薄く食べやすい「はるみ」を交雑し育成されました。

2. 果実重は平均150g程度で中生カンキツとしてはやや小ぶりです。果皮は橙色で滑らか、剥皮性は中程度で、浮き皮は発生しません（写真）。果皮の完全着色は1月上旬と遅く、緑斑が残ることがあります。



写真 「あすみ」(中央)、「せとか」(左)、「はるみ」(右)

3. 1月下旬より成熟期を迎え、果汁の糖度は15%程度、酸含量は1.0%程度となり、極めて濃厚な食味となります。じょうのう膜は比較的柔らかく、果肉はやや硬いのが特徴です。果肉には機能性成分のβ-クリプトキサンチンがウンシュウミカンと同程度に含まれています。

4. 樹勢は中程度で、樹姿は直立性と開張性の中間となり、トゲの発生はやや多いです。露地栽培でのかいよう病の発生は中程度で、「はるみ」より多い傾向です。そうか病については一般的な防除により栽培上問題になることはありません。

☆ 活用面での留意点

1. これまでの試作試験では、いずれの試験地でも特に水分ストレスを付与することなく、高糖度果実が生産されており、土壌および気象条件に対する適応範囲は広いと考えられます。ただし、成熟期が厳冬期にあたるため冬期温暖な地帯での栽培が望ましいです。

2. 果実の着色遅延の改善やかいよう病の発生を防止するという観点から施設栽培が適しています。

3. 詳細については、(独) 農研機構果樹研究所カンキツ研究興津拠点(電話：054-369-7100)にお問合せください。

(果樹研究所カンキツ研究領域・上席研究員 吉岡照高)